

この素晴らしい侠客立
ちに祝福を

単三抜き電池

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

はじめに

この作品には

- ・設定の独自解釈
- ・キャラの性格が違う
- ・処女作だと言ってハードルを下げようとする思惑などが含まれます。ご注意ください。

宮本武蔵との死闘のあと、花山は病院で集中治療を受けている。

昏睡状態の彼の意識は女神のところへ呼び出されていた。

『魔王を倒してください』

そう言われ異世界に飛ばされた花山。

ピクルの好敵手だった恐竜のような生物、人外の魔王軍を相手に彼はどのような喧嘩をするのか……。

刃牙道くバキ道の間くらいです。

転生後のこのすば世界はキャベツ狩り直後くらい。

大まかな出来事は原作通りやるつもりです。

カズマは出ます。

目次

プロローグ	1
第一撃 出会い	7
第二撃 ギルド	14
第三撃 クエスト	21
第四撃 首無し騎士	28
第五撃 報酬金の使い道	40
第六撃 悪霊屋敷	52
第七撃 熊鍋	61
第八撃 機動要塞	70

プロローグ

花山薫は侠客であり、漢である。

たとえ警察とヤクザという間柄であろうとも、友のために泣き、地に額をつけようと
するものがいれば儀を以て動くのが花山薫という漢だった。

かくして花山薫はかの剣豪『宮本武蔵』との死合いに挑み——敗北した。

「今夜はよオ……」

——嘘つきばっかりだ………

刃牙に、内海に、武蔵に見送られながら花山は病院へと運ばれていく。

腹に、顔に、そして何より、“侠客立ち”にも新たな傷を刻まれた花山薫。

そんな、生死の境を彷徨う彼の精神は今、不思議な空間へと呼び出されていた。

真っ白い部屋の中。気付けば花山はそこにいた。

彼がまず驚いたのは自分の身体のことだった。出血がなく、痛みがない、おまけに服
装はいつもの白いスーツに革靴。つい先刻宮本武蔵と死闘を繰り広げた彼の身なりが

この様なものであるはずは到底ない。仮に傷が癒え目を覚ましたのだとしても、ここが病院のベッドの上でなく病衣も着ていないというのは少々おかしな話である。

そして花山の目の前では、背から翼の生えた少女が深々と頭を下げている。

「初めまして、花山薫さん。突然この様な場所にお呼びしてしまい、本当に申し訳ありません。」

「……嬢ちゃん、頭を上げな。」

そういわれた少女はゆっくりと身体を起こすと、花山が疑問に思っているであろうことの説明を始めた。

ここが死後の世界であること。

自分が前任からこの場所を引き継いだ女神であること。

異世界への転生を斡旋していること。

その他ほかの死者への説明と同じ内容のものを一通り話し終えた少女は、一度目を伏せると意を決したように花山へ向き直り、再び頭をさげた。

「そして最後に、花山さんに謝らなければならぬことがあります。……実は貴方はまだ死んでいないのです。」

先ほどまで静かに聞いていた花山も、さすがにこれには驚いた。

ヤクザ——それも日本一の喧嘩ヤクザと称される彼は、明日を見る生き方をしていな

い。だからこそ彼は強く、そして潔い。死後の世界に自分がいると聞かされればそれを受け入れるだけの度量は持っている。

しかし、まだ生きているにも関わらずこの場所にいとすれば話は別だ。何故という疑問は当然浮かんでくる。

そんな花山に対し、謝罪の姿勢のまま少女は続ける。

「宮本武蔵との死闘後病院に運ばれたあなたは現在、昏睡状態のまま手術を受けています。死亡こそ確定していませんが、大量の出血と内臓へのダメージで非常に難しい状況にあるのは事実です。」

「……」

「私は花山さんに異世界へ行つて頂きたく、生死の境にいるあなたを無理やりここへ連れてきました。先ほどご説明した通り、異世界は魔王によって脅かされています。貴方ほどの逸材を送らない手はないのです。」

顔を上げた少女は縋るような眼で続ける。

「失礼は重々承知しております。勿論タダでは言いません。もし転生していただけたなら、冒険終えた後それを元の世界での数分の夢として処理し、必ず一命をとりとめた状態で元の世界へ送り返すことを約束します。ですのでどうか、魔王討伐に力を貸していただけないでしょうか。」

暫くの沈黙の後、花山は一つの間いを投げかけることにした。

「嬢ちゃん、少し前に烈って男が来なかったかい？」

「…烈永周さんのことですね？ 残念ながら天界の規定により、20歳を超えた方は天国または地獄に直接送られてしまうのです。」

なるほど、と花山は思う。

拳雄烈海王が異世界で戦力にならない訳がない。そんな彼がすでに死んでいるにも関わらず、死にかけの自分を無理に引っ張ってくる理由はわかった。

しかしそれでも、花山はあまり乗り気ではなかった。

「……人様の喧嘩に、首突っ込むもんじゃねえ。」

異世界とはいえ他人の勝負に加勢する。これはあまりに花山の美学とかけ離れている。

さらに言えば、生にしがみついたために何かをするという行為もまた、彼の生き方にはそぐわない。死ぬときは死ぬ。生きるとは生きる。それでいいのだ。

「……ピクル。」

不意に少女が呟いた名は、花山の関心を大きく引いた。

「彼がかつて相手にしていた恐竜。それらを上回る生物たちが、異世界にはいます。」

ほんのわずかな時間の押しっくら。ピクルとの接点はそれだけだ。しかし、その先を望む心が、喧嘩師としての血が騒いだことも否定できない。

かつてピクルを『比べっこが大好き』と称した花山もまた、比べっこが大好きなのである。

そんなピクルの旧友以上の生物がいる。

この言葉は花山の心を大きく動かし、彼の口は自然と笑みに歪んでいた。

「……わかった、連れてきな。」

「ありがとうございます！では異世界にもつていく特典についてですが——。」

少女が言うには、転生者は一つだけ好きな恩恵を授かって異世界に行くことができるそうだ。

最強の特殊能力、圧倒的な才能、はたまた神の武器に至るまで、なんでも。

しかし、そんなものも花山が欲しがらないのは少女も十分理解していた。

「さて、ここまで説明しましたが花山さんには特別にこちらでアイテムをご用意しています。」

少女はそう言うと、パチンと指を鳴らす。すると虚空から麻袋が一つ現れた。

「この中には、向こうの世界で生活するに十分なお金と、それから——。」

少女が麻袋から取り出したのは、ワイルドターキーの瓶。彼女はそれを開けると、ど

ここらともなく取り出したグラスに注いでいく。

不思議なことに、グラス一杯分注いだにも関わらず、瓶の中身は一切減っているように見えなかった。

「このように、女神の力で一切減ることのない酒瓶をつけさせていただきます。勿論、味も劣化することはありません。」

少女は『どうぞ』と言ってグラスを花山に渡す。花山はそれを一気に飲み干すと「うめえ……。」

と呟いた。そして少女から麻袋を受け取ると、彼の足元に魔法陣が浮かび上がる。

「花山さん、私のわがままを聞いてくださってありがとうございます。貴方が魔王を打ち倒すことを心より祈っています。」

「……ありがとう。」

それは何に對しての感謝だったのか。祈りか、酒か、はたまた強敵との出会いか。兎にも角にも花山が異世界へと旅った。

一人残された少女は、大きくガッツポーズをすると、叫んだ。

「よしッッ!!これで見られるッッ!!花山薫対魔物ッ花山薫対魔王軍ッ!!垂涎もののプラチナカードッッ!!」

アクアの後任の女神は、喜声が木霊した――。

第一撃 出合い

駆け出し冒険者の街、アクセル。

先日のキャベツ狩りクエストの甲斐もあつてか、夕暮れだというのに市場はまだまだ賑わっている。

そんな人混みに一瞬の静寂がもたらされた。

巨躯い。

冒険者の中には体格に恵まれた者も者も少なくない……が、彼と比べたら貧相な部類に入るだろう。

身長190・5cm、体重166kgの巨体。

頸が太い。

胸が分厚い。

この世界では珍しい真っ白なスーツから覗く手と顔には、深く大きな傷が刻まれている。

通行人の視線を無理やり集めながら、当の本人はそんなことは意にも介さず歩いていく。

大通りに差し掛かったところで、花山は一軒の宿屋を見つけた。彼には少々狭い部屋ではあるがとりあえずの拠点には悪くない。

異世界に来たものの、花山には一つ大きな問題があった。

彼はゲームをやらない。他の転生者のように『RPGではまずギルドへ向かう』といった思考がない。

全く知らない世界での、当てのない生活。とはいえそれで生き方が変わる男でもない。酒を煽りながら彼は『成人の儀の山籠もりの予行だ』などと、そんなことを思っていた。

夜――。

花山は町へと繰り出していた。

夜の街を歩くこと。日本にいたところはパトロールの意味合いも兼ねていたこの行為は花山の習慣だ。

「ん……？」

しばらくブラついていると、花山はある墓地を見つけた。

お世辞にもいい雰囲気とは言えないそこは、手入れはあまりされておらずいくつかの墓石に至っては傾いたり倒れたりしてる始末だ。

花山は任侠道を歩むが故に死者の弔いを非常に重んずる。

そんな彼だからこそ、この墓地のあり様に思うところがあつたのかもしれない。花山は墓地へ入っていくと、スーツが汚れるのも気にせず傾き倒れた墓石を直し、墓場の土を固めなおす。

掃除が一通り終わったころ、月は彼の真上まで上がっていた。

ガサツ——。

不意に花山の背後で物音がした。彼が幽霊を信じていたのか——それは定かではない。がともかく『墓地』で『深夜』に『物音』という状況に、少しばかりの緊張を伴いながら彼は振り向いた。

視線の先にいたのは茶髪の美女。黒い衣装に月明りも相まって幻想的な雰囲気醸し出している。

「まあ、共同墓地がこんなに綺麗に……！これ、貴方がやってくれたんですか!？」

「……。」

沈黙を肯定と捉えた女性はさらに続ける。

「私はこの町でマジックアイテム屋をやっていますウイズと言います。お名前を聞いてもいいですか？」

「……花山……薫だ……。」

差し出された小さな手を、傷だらけの大きな手が握る。

嬉しそうにニコニコとしているウイズを見て、花山は疑問を口にした。

「……こんな時間に一人で何しに来た？」

深夜のアクセル。しかも場所は墓地。ほとんど暗闇のこの場所に女性が一人でやってくるというのは少々不自然に思えた。

「それは私が、この墓地の迷える魂を定期的に天へと送ってあげてるからです。」

嘘を言っているようには見えないが、いきなり信じられる話でもない。が、ウイズが実際に魂を天に送る姿を見たなら話は別だ。

ウイズを中心に墓地全体を覆うような魔法陣が現れる。そして、彼女を中心に怪しくも幻想的な光が天へと昇っていく。

「……………」

『異世界』という場所の意味を、花山は改めて実感した。

「リッチーがこんな場所に現れるとは不届きな！成敗してやる！」

天へ向かう霊も少なくなってきたころ。突然、墓地全体に女の声が響いた。

声の主である青い髪が、ウイズを睨みつけながらズンズンと墓地へ踏み入って来る。

「やめて！やめてください！この魔法陣は、成仏できないでいる魂を天に還してあげる

ためものです！壊そうとしないで！」

「何よー！リッチーの戯言なんて信じられるわけないじゃない！そんな善行はアークプリーストであるこの私がやるから、あんたは引っ込んでなさいよ！魔法陣を壊すついでにあんたも共同墓地ごと浄化してあげるわ！」

「ええ!?や、やめてください！話を聞いてください！」

「問答無用！『ターン……』って何よアンタ！そこを退きなさいよ！」

攻撃の気配感じ取った花山は、二人を遮るように立ちふさがった。

「ハナヤマさん……！ありがとうございます……！」

花山の背中に隠れたウィズは睨視から逃げるように顔を少しだけ出している。

「おーいアクア、一人で先行くなって……ヒイツ!？」

膠着状態となったところにやってきた少年は、花山と目が合うと絶句した。

(ヤクザだ……ヤクザが何でここに!?)

フツウではない経歴を思わせる、初めて出会う彼と同郷の人間。

初対面当時のことを、少年——サトウカズマ氏はこう語る。

「驚いた、なんてもんじゃなかったですよ。」

「圧倒的……っていうか、もうデカいとか怖いとか、そういう言葉では収まらないっていうか……。」

「実物見たのは初めてでしたけど、直感で分かりましたね。あ、ヤクザだって。」

「あの顔の傷、絶対に冒険でついたものじゃないですもん。」

「めぐみんが『アンデッドにしか見えない』とか言ったときはもう、心臓止まるかと思いましたがよ。」

「……ハナヤマですか？ 基本的に無言でしたよ。」

「でも一言だけ。『俺のツレだ、見逃してやってくれ』って……。」

「それ聞いてようやく状況が見えてきましたよ。」

「ハナヤマの後ろに隠れるウイズと、二人に食って掛かるうちの駄女神。ゾンビメーカー討伐に来たのにこの状況はおかしいなって。」

「そこで俺が仲裁に入ったわけですよ！ 話を聞いたらウイズは凄くいい人なのがかつたので、浄化を引き受ける代わりに見逃すことにしたんです。どうです？ この俺の交渉力！」

「えっ……？ ああ、ハナヤマは……ウイズがリッチーっていうのは全然気にしてないみたいでしたよ？」

「関係ないんでしょうね彼にとって。自分の目で見たことで十分なんですよ。実際ウイズはいい人だし。」

「後はもうそのまま解散ですね。俺達は不満そうなアクア連れてさっさと帰りました。」

……墓地の外出たら緊張の糸が切れて汗が噴き出してきましたよ。」
これが冒険者カズマ一行と、喧嘩師花山薫の出会いだった。

第二撃 ギルド

墓地での出来事の翌日。

「すごい！何ですかこの数値は!?特に筋力と生命力!こんな数値今まで見たことありませんよ!」

ギルド内に受付のルナの声が響き渡る。

一斉に集まった視線の先にいたのは、ウィズに連れられギルドへとやってきた花山だった。

昨夜。墓地からの道すがら、自分の状況を花山はかいつまんで話した。

「じゃあまずは冒険者ギルドですね、今日のお礼もありますし明日一緒に行きましょう!」

そう言われ転生二日目でギルドへとやってきた花山。

先ほどのルナの声で人だけができ、『見ねえ顔だな』『貧乏店主さんの知り合いみたいだぜ』などと軽い騒ぎになっている。

「他にも敏捷性に器用度も大きく平均を上回ってますよ!……ただ……。」

「ただ?」

花山の代わりにウイズが尋ねる。

「知力があまり高くないのと、その……魔力が……全くありません。」

「ええ!？」

「……。」

魔力がない。

これは冒険者にとつては致命的と言える。回復、ステータスアップ。スキルはいずれも魔力なしでは発動できないからだ。

「これだけのステータスがあるのにもつたいないですが、冒険者稼業はやめたほうがいいかと……。」

「……構わねえ。登録を続けな。」

「ちよ、ちよつとハナヤマさん! 冒険者になるつもりですか! 魔力が無いんですから辞めたほうがいいです!」

「……なんでだ。」

「なんでつて……いいですか? 魔力がないということは、呪文もスキルも使わずにクエストをこなすつてことです。常識的に不可能です!」

必死に花山を止めようとするウイズ。だが彼女は、目の前の漢が常識外れであるということをまだ知らない。

「関係ねえ。」

「~~~~~ッ！」

一切の説得を無駄と思わせる一言に、ウイズは言葉を失った。

「あの、では職業を選んでいただけますか？……とはいっても魔力0だと基本職の『冒険者』しか選ばませんが……。」

「……ん。」

もったいない。そんなことを呟きながらルナはカードの職業欄に『冒険者』と記載した。

かくしてアクセルに『冒険者』花山薫が誕生したのだった。

花山がギルドを訪れる少し前。

クエスト掲示板の前で、ゆんゆんは悩んでいた。

彼女は優秀な冒険者だ。職業は上級職であるアークウイザードであり、多彩な魔法を持ちながら前に出て戦うこともできる。

そんな自身の万能さも手伝って、今まで彼女はぼっち……もといソロでクエストに行っていた。

だが、今回は少し状況が違った。

「うーん、難しいクエストしか残ってない……。」

張り出されているのはどれも非常に難易度の高いクエストばかり。

噂では最近この辺りに魔王軍の幹部が住み着いたため、弱いモンスターが隠れてしまっているらしい。

クエスト達成できなくもないだろうが、万が一の場合を考えると、一人で行くのは少し不安だった。

（そうだ！学園でめぐみんが私にやったようにしていれば……！）

ぼっち気質のゆんゆんに他の冒険者を誘う勇気はない。そこで彼女が考えたのは『掲示板の前でウロチョロして、誰かが声をかけてくれるのを待つ』という、彼女の中では親友となっている人物から着想を得た作戦だった。

彼女の往復はしばらく続く――。

「これがクエスト掲示板。ここからクエストを選んで受注するんです。」

ウィズは花山にギルド内部の案内をしていた。

「最初は簡単なクエストを受けて、徐々に難易度を上げるようにしてくださいね？でな

いと下手をすれば死んでしまいますよ?」

そう言いながらウイズは張り紙を見る。

「あら? 高難易度のクエストしかありませんね……。残念ですがハナヤマさん、クエストはまた今度にしましょう。」

そんなウイズの言葉を無視し、花山はクエスト掲示板を物色し始めた。

「ハナヤマさん! これはハナヤマさんにはまだ無理なんですつて! 簡単なクエストが出たときにしましょう!」

いくら花山のステータスがよくても、彼はスキルも使えないレベル1の冒険者。ウイズが止めるのも無理はない。

「難しいから、やらねえ。易しいから、やる。そういうもんじゃねえだろう。」

「……分かりました。今回は特別に、私もついていきます。」

魔王軍幹部の彼女は魔物と戦うのを好まない。

だが花山の説得を不可能と悟ったウイズは、みすみす死地へ送る訳にもいかないと手を貸すことにした。

「クエストに一人で行くのはあまりオススメしません。高難易度なら尚更です。まあ今回で分かって貰えるとは思いますが……。次回からはちゃんとパーティを組んでクエストに行ってくださいね? ……て、あら?」

そこでウイズはようやく、クエスト掲示板の前で行ったり来たりしている少女に気が付いた。

奇妙な行動の意図を察したウイズは、もしかしたら次回から花山と組んでくれるかもと期待して声をかけることにした。

「あの、よかつたら一緒にクエストに行きませんか?」

ウイズの言葉に、ゆんゆんは嬉しそうに振り向いた。

「私でよければ是非……非……」

ゆんゆんの笑顔は一瞬で凍り付いた。

振り向いた先にいた茶髪の美女——の隣。圧倒的体躯を持つ漢の、見下ろす疵面の威圧感たるや。

「初めまして、私はウイズと言います。こちらは花山薫さん。お名前を聞いても?」

我に返ったゆんゆんを次に襲ったのは羞恥心。全く知らない人の前で自己紹介をするという恥ずかしさにもじもじとしてる。

「わ、我が名はゆんゆん! アークウィザードにして上級魔法を操る者! やがては紅魔族の長となるもの……!」

真つ赤な顔で言い放ったゆんゆんは、笑われるのを予期して気が重かった。

「まあ、紅魔族のアークウィザードなんですわね! 心強いです!」

ところが笑われるどころか帰ってきたのは称賛の言葉。花山も黙ってはいるが真剣に聞いている。

「あの、私の名前を聞いて笑わないんですか……？」

ゆんゆんが恐る恐る尋ねる。口を開いたのは花山だった。

「人様の名だ、笑っていいもんじゃねえ。」

（あれ、この人もしかしてすごく良い人なのかも……顔怖いけど……）

ゆんゆんは少し感動していた。

「実はこの方、冒険者になったばかりなんです。力を借して頂けますか？」

「もちろん、協力させてもらいますッ！」

涙が出そうなのを堪えると、ゆんゆんは嬉しそうに言った。

第三撃 クエスト

花山、ウイズ、ゆんゆんの3人はアクセル郊外の森まで来ていた。

目的はマンティコアとグリフオンの討伐。

この二体が縄張り争いをしているので何とかしてほしいというクエストだ。

「いましたーグリフオンですー……幸い今は一匹だけですね、このまま各個撃破と行きましようー！」

上空を旋回しているのは、ライオンの下半身に鷲の上半身が生えたモンスター。

「私が魔法で撃ち落としますー！ハナヤマさんとウイズさんは落ちてきたところを……」

「ゆんゆんさん、危ない！」

初のパーティーでのクエストということもあり、ゆんゆんは少々浮かれていた。

獯猛な生物の前で背を向けるといふ、いつもなら絶対にしないであろう行為を、気の緩みからしてしまったのだ。

そんな隙をグリフオンが見逃すはずもない。

グリフオンは猛禽類特有の急降下でゆんゆんに迫る。

「(どうしよう……！避ける？魔法を打つ？間に合わな——) キャッツ!？」

反応したのは花山だった。彼はゆんゆんの襟首をつかむとウイズの方へ放り投げる。ウイズはゆんゆんを受け止めたが、グリフォンの鉤爪は花山の眼前に迫っていた。

「ハナヤマさんッ!!」

ウイズが叫ぶ。土煙をまき散らしながら、グリフォンが花山にぶつかっていく。やがて煙が晴れ、彼女らの目に飛び込んできたのは……。

「~~~~~ッ!!」

手四つ。人間同士ならそう表現されるだろう。花山はグリフォンの両の鉤爪を両手で各々しっかりと受け止めながら、10mほど引きずられたところで攻撃を受け止め切っていた。

グリフォンは混乱していた。

ここに自分の敵はマンティコアしかいないはずだ。

こんなサイズの奴らなんて相手にもならないただの餌。

であるにもかかわらず。

自分よりはるかに小さいこの雄から、グリフォンのDNAが感じたものは——
山のように大きな、出会ったこともない天敵——。

ミシミシ……

掴まれた鉤爪が、徐々に圧迫される感覚。

強者として生まれ、戦いではなく『狩り』に用いてきたからか。グリフォンは自らの鉤爪に起こる異変に気付くのが一瞬遅れた。

バキヤツツ!!

自慢の武器が、無残にもひしゃげた。

解放された両足に激痛が走る。情けない悲鳴を上げながらもグリフォンは再び空へと飛んだ。

彼を突き動かしたのは『怒り』だった。

グリフォンにとって、自分以外のすべてが『餌』のはずだった。マンティコア^あだって、いずれは餌になる。本気でそう思っていた。

だからこそ許せない。

この小さな雄は餌にならないどころか、鉤爪を折り、痛みを与えてきた。長らく王者として生きてきたグリフォンの怒りに火が付いた。

一緒にクエストに出ていた魔道具屋の店主は語る――。

「グリフォンが上空へ飛んだんです、……最初は逃げたかと思いました。」

「でも違いました。嘴を向けてハナヤマさんに突っ込んでいったんです。」

「一撃で仕留めようと思ったんでしょね、それはもうすごい速さでした。」

「ハナヤマさんですか？ 彼は全く逃げようとしなかったというか……。」

「なんとというかこう……遠投？」

「もう全部体重乗せて、真正面からスッコーンで」

「自分の頭がおかしくなったのかと思いましたがよ、グリフォンの必殺の一撃にパンチをぶつけたんですから。」

「普通死にますよ、あんなことしたら。」

「ゴツチャっていうか、ガツチュっていうか……」

「私、最初壊れたと思いましたがよ、ハナヤマさんの腕。」

「グリフォンは自分でつけた勢いが仇になったんでしょね……。」

「壊れたのは嘴の方で、そのまま口内に入った拳が後頭部まで貫通してました――。」

壮絶な雄闘士の戦い。

それを制した小さな雄は、左手を引き抜くと赤く染まったスーツもそのままにウイズとゆんゆんのところまで歩いてくる。

「……すごい……。」

どちらが眩いたのか。彼女らの胸に憧れのような、感動のような思いが去来していた。

——こういう強さもある。

彼女らは一つため息をつくど、いつの間にか握っていた拳を開いた。

「あの、ハナヤマさん！」

ゆんゆんが勢い良く立ち上がる。

「残りの一体の討伐、ハナヤマさんは見てもらえませんか!?……私、ハナヤマさんに見てもらいたいです！私の戦いを……ッ！」

決意のこもった目でゆんゆんは訴える。すると、魔法で花山のスーツを洗浄していたウイズも名乗りを上げる。

「あの、私も参加していいでしょうか。……その、昔の血が騒いでしまつて……。」

「……ガンバってきな」

ゆんゆんもウイズも見かけによらず血の気が多い。花山の戦いを見て興奮した彼女

らが二戦目のメンバーに決まった。

マンティコア。

人の顔に獅子の胴体、サソリの尾を持つ怪物である。

高い攻撃性と魔力耐性を持ち、並の冒険者ではまるで歯が立たない相手だ。

だが今回は相手が悪かった。

アクセル屈指のアークウイザードに、かつて氷の魔女と恐れられたリッチー。

マンティコアに魔法の嵐が降り注ぐ。離れたところで見ている花山も、初めて見る魔法に少々興奮した。

『カースド・クリスタルブリズン』！』

『ライト・オブ・セイバー』!!』

戦いの末、氷漬けにされ首を切り落とされた獣はその命を終えた。

「すげえもんだな、魔法つてのは。」

「ハナヤマさんの拳に比べたら大したことはないですけどね。」

戦いの後、ゆんゆんに回復魔法をかけながらウイズは答えた。ちなみにウイズは全くの無傷である。

「ハナヤマさん、お願いがあります！」

あちこちにあつた小さな切り傷が消えた後、ゆんゆんは花山に向き直った。

「次からもまた一緒にクエストに行つていいですか!？」

「好きにしな。」

ゆんゆんの頭に手を置くと、花山は短くそう言った。

ウイズと顔を見合わせ、綻ばせたゆんゆん。

こうして花山の初クエストが終わり、初めてのパーティーメンバーが出来たのだった。

第四撃 首無し騎士

「この前は本当に焦ったわー、まさか異世界まで来てヤクザに出会うとは……」

ギルド内で仲間と昼食をとりながらカズマは呟いた。

「『ヤクザ』とはそんなに恐ろしいんですか？カズマ。確かに顔は傷だらけでアンデットみたいでしたけど……。」

「おいめぐみん、間違ってもそれ本人の前で言うなよ。簀巻きにされて川に流されても俺は助けないからな。」

「なっ、簀巻きッ!?!ちよ、ちよっで行ってくる!」

「待てダクネス!お前みたいな変態送り込んだと思われたら俺まで殺される!」

身内のDMを何とか抑え、カズマはシユワシユワで一息つく。

「にしてもあいつ、いきなりあんな高難度のクエスト達成するなんてスゲーな。やつぱり女神から特典貰ってるやつは違うぜ。」

駆け出し冒険者が初クエストでグリフォンとマンティコアを討伐した。

ここ数日、ギルド内はこの話でもちきりだった。

「それなんだけど……。」

先ほどまで料理に夢中だったアクアが口を挟む。

「あの人、どうも能力とかステータスの特典を受け取った形跡がないのよね。だから貰ってるとしたら武器やアイテムなんだけど……噂では素手で倒したんでしょ？」

作り話だと一蹴されてしまいそうなこの噂が、ここまで町を賑わせているのは理由がある。

一つはギルドカードに記載された討伐モンスター。そしてもう一つは、住人からも信頼の厚い人物であるウイズの証言。

そして彼女の話によれば花山はなんと、たった一人で、拳一つでグリフオンを討伐したというのだ。

女神であるアクアには、転生者がどんな恩恵を受けているか、手にした武器が女神から与えられたものか、そういうことが一目でわかる。

そのアクアが、花山の身体能力は女神の力ではないと言う。ということは一——。

「え？じゃあ何、元々死ぬ前から馬鹿みたいに強くて、異世界でも十分通用してるってこと？……いやいや無いってそれは、お前いいよ女神としてポンコツになってんじやねーの？」

「あーいま私を馬鹿にしたわね!!謝って!女神に向かってポンコツなんて言ったことを誠心誠意謝って!」

『緊急！緊急！全冒険者の皆さんは直ちに武装し、戦闘態勢で町の正門まで集まってくるださい』

アクアがカズマに食って掛かったその時、町中にアナウンスが流れた。

街は、一気に慌ただしくなった。

「毎日毎日毎日毎日！俺の城に欠かさず爆裂魔法を打ち込んでいく頭のおかしい大馬鹿は、誰だアーーーーーッッ!!」

アクセルの正門。集まった大勢の冒険者たちに向かってデュラハンの怒号が飛んだ。

ゆんゆんには心当たりがあった。爆裂魔法をこよなく愛する自分の親友。もしや――否、まず間違いなくめぐみんの仕業であると察した彼女は逡巡する。

（このままだときつとめぐみんが殺されちゃう……。私が代わりに名乗り出れば……。）
震える体でそんなことを考えるゆんゆんの肩に、大きな手が置かれた。

「ハナヤマさん……。」

「こいつはどういう状況だ？」

「あのデュラハン、私の親友を狙っているみたいなんです……。私が身代わりになろうと思っただんですけど……相手は魔王軍の幹部だって聞いて……。勇気がっ……。出なくて……。」

うつむいたゆんゆんの頭を花山は乱暴に撫でる。

「下がってな。」

そういつて歩き出した大きな背中をゆんゆんは信じることにした。

驚いたのはめぐみんだ。集団内で犯人探しが始まる中、自分が意を決するよりも先に他人が向かっていくではないか。

驚きで言葉を失った彼女は仲間とともにその背を見送った。

「ほう……。貴様がやったのか？魔法を使うようには見えないが……。」

黒い鎧のアンデットと、白いスーツの人間。二人の間合いが十二分に近づいたところで、デュラハンは尋ねた。

「……あんた……。」

問いに対して花山は、かけていた眼鏡を外しながらゆっくりと口を開く。

「強えんだって……？」

言葉の意味を、デュラハンは瞬時に理解した。かつて騎士だった自らの、すでに死したはずの細胞が沸き立つような感覚が走る。

「ククク……ハハハハハッ！よもやこんな街に貴様のような勇敢な男がいるとは！いいだろう！」

「俺は魔王軍幹部が一人、ベルディア！騎士道に則り貴様との勝負を受けてやる！」

そういつて剣を向けるベルディアに対して、花山は眼鏡を手から落とすとズボンの両裾を手でつかむ。

次の瞬間、服を一気に引き破り、禪一丁の五体がそこに現れた。

「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」

冒険者一同の、声にならない声。

顔の傷からある程度予想はしていたが、体の傷は想像以上だった。

そして何より背中に描かれた大きな刺青。切り刻まれ歪んだその刺青は、もはや美しくすらあつた。

「無茶だ！」

叫んだのはカズマだった。

最初、カズマはもしかしたらと思っていた。

自分と同じ転生者の花山なら、女神からもらったアイテムで魔王軍幹部をも倒せるの

ではと。

だが、そんなカズマの期待を裏切るように花山は何も持たぬ姿になってしまった。

アクア曰く能力の特典ではない以上、禪一丁という何の武器も持たないあの姿では勝ち目などない。

「そ、そうです！身代わりになるなんて辞めてください！デュラハン！城に爆裂魔法を撃つたのは私です！その人は関係ありません！」

「おいアクア！お前の力でハナヤマを援護出来ないか!？」

カズマの声に、アクアだけでなく周りの冒険者たちも奮い立つ。『私を誰だと思ってるのよ』『そうだ、俺たちも参戦しよう』『全員で行けば活路はある』そんな言葉が聞こえ始め、今にも向かっていきそうな集団を止めたのは――

「ゆんゆん!?あなた何しているんですか!？」

集団の前に立ち、両手を広げるゆんゆん。知り合いの姿に思わずめぐみんは声を荒げた。

「めぐみん、あの子知り合いなのか!？」

「ええ、ですが説明してる暇はありません……。ゆんゆん！そこを退いてください！」

「……あのね、めぐみん。ハナヤマさんは私に『下がってな』ってそう言ったの。」

「だから何ですか!?!私のせいで誰かを死なせるわけにはいきません、退かないというの

なら容赦しませんよ！」

杖を向けるめぐみんに対しても、ゆんゆんは怯まない。

「ごめんね……。でもこれはもう『ハナヤマさんの喧嘩』なの。邪魔させるわけにはいかない。」

まだ出会って数日だが、ゆんゆんは花山のことを理解し始めていた。

真つ直ぐめぐみんを見据える目は、めぐみんがかつて見たことのない真面目な視線だったという。

そんな騒がしい正門付近とは対照的に、臨戦態勢に入った二人の周りは禅寺のような静けさだった。

「姓は花山、名は薫。ベルディアさんにや何の恨みもありやせんが……シメさせてもらいやす。」

花山が名乗り、構えた。

広く開脚し、両拳を高く広げたその姿勢は、相手の反撃などまるで考慮しない。

これから命のやり取りをする相手に対し、何一つ防御ぐつもりはないと宣言しているのだ。

これを侮辱と感じなかった理由は、ベルディア自身もわからない。

「その意気や良し!!」

袈裟懸けに剣を振り下ろし、戦いの幕が上がった。

——硬ッッ

肩から真つ二つ。そのつもりで振り下ろした剣は 鎖骨一本断つことができず止まった。

宮本武蔵曰く『骨の宮』。その強度は魔王軍幹部の一振りですえ弾いてしまう代物だった。

血の気が引いた錯覚を覚えるベルディアが見たもの……。

投擲のフォームを思わせる、深い深い振りがぶり——。

刹那。ベルディアの胸部に衝撃が走った。

(なぜ、空が見えている……?)

(なぜ、あの男があんなに遠い……!?)

たかが駆け出し冒険者のパンチ一発と侮る心があったのだろう。何が起きたかもわからぬまま、ベルディアは花山の10mほど先で仰向けになっていた。

混乱したまま半身を起こしたベルディアは自分に何が起こったのかをようやく理解した。

「~~~~~ッ!?!」

甲冑についた、巨大な拳の跡。自慢の鎧は無残に凹み、敵の破壊力をこれでもかとして示している。

「まだやれるかい?」

「当然だツ!!」

近づいてきた花山に切りかかる。

肉に刃が通るのも気にせず放った花山の拳はベルディアの腹をとらえた。

「フ……フフフ……。」

花山の拳を受けたベルディアは嬉しそうに笑い出す。

——こんな男見たことが無い。

「お前のような男に会えたことを邪神と魔王様に感謝する。だが……。」

ベルディアの雰囲気が変わる。

「俺も騎士として、魔王軍幹部の一人として、負けるわけにはいかない!」

「——これ、まずいんじゃないか?」

誰かが言った。

先ほどまで固唾をのんで戦いを見守っていた冒険者たち。だが、今は皆表情が暗い。

理由は一つ。ベルディアが戦法を変え、花山が押され始めたのだ。

一太刀入れ、離れる、また一太刀入れては、離れる。

ベルディアが選んだのはヒットアンドアウェイ戦法。だんだん慣れてきたのか、今では花山の攻撃を完全に避け始めている。

「ゆんゆん！これ以上は待てません！助けに行かないと！」

めぐみんがゆんゆんに掴みかかる。

「そうだ、さすがにこれ以上はやばい！アクア！『ターンアンデット』を……」

カズマがアクアを探し振り向いた瞬間、背後で凄まじい破壊音が響く。直後、冒険者一同は歓声に包まれた。

「え？え？！」

サトウカズマは、決着の場面を見逃した――。

「ツ!!」

もう何太刀入れたらどうか。

花山の足元には血だまりが出来、額には汗も滲んでいる。だというのに。

目の前のこの男は未だ倒れず、それどころか反撃までしてくる。

(ハナヤマよ、それはもう食らわん。)

ここで花山がとつたのは、初撃と同じ、遠投を思わせる振りかぶり。

(狙うは、がら空きの腹……ッ)

意識を研ぎ澄ませ踏み込んだベルディアは、花山の腹部を切り裂いた——はずだった。

ベルディアは心のどこかで恐怖していた。アンデットよりも不死身に思えるこの男に。

そして、最初に食らった一撃。その威力のほどは自らの甲冑に刻まれている。

そんなバカげた攻撃をもう一度予告された彼は、噴き出した恐怖心で踏み込みが鈍った。

本能が、死肉に宿る魂が、怖气了。

振りぬけば相打ちだっただろうその剣を、ベルディアは防御に使った。

直後激突した彼の拳は、ベルディアの剣をへし折り拳骨型にへこんだ胸を再度打ち抜いた。

「……俺の負けだ。」

花山の全力を二度受けだ胴体は、上半身が破裂したように千切れてしまっている。

「恐怖など……デユラハンになったときに捨てたと思っていたがな。」

「……いい……喧嘩ゴロだった。」

花山の言葉に驚いた顔をしたベルディアは、愉快そうに笑った。

「ハッハッハッ！俺は騎士として、決闘で負けたことは無かったが……そうか、これは喧嘩だったか……。」

花山がベルディアの横に胡坐で座る。出血が多く意識が朦朧としているようだ。

「ハナヤマさん大丈夫ですか!?!すぐ治療します!」

走ってきたのはゆんゆん。少し遅れてカズマ達も到着する。

「さて、貴様らの中にアークプリーストはいるか?」

「え?ああ、いますけど……。」

カズマはベルディアの頭にアークアを差し出す。

「そうか、今なら初級冒険者の『ターンアンデット』でも効果があるだろう。浄化してくれ。」

ベルディアに促され、アークアが浄化魔法をかけた。

「ハナヤマ……楽しかったぞ、ありがとう。」

「……ヘッ。」

花山が小さく笑う。魔王軍の騎士は、青い光に包まれ満足そうに消えていった。

こうして、花山の魔王軍との初戦闘は幕を閉じた――。

第五撃 報酬金の使い道

ベルディアとの戦いからしばらく。

未だ興奮冷めやらぬギルド内は、二人の人物を取り囲んで大盛り上がりを見せている。

「……勇敢な戦いぶりで見事魔王軍幹部を相手に打ち勝ったハナヤマさん。そしてアクプリーストとしてその魂を浄化したアクアさん。お二人の功績を称え、デュラハン討伐の懸賞金を両名に1億5000万エリス贈呈いたします。」

ルナが言い終えると、周囲でドッと歓声が上がった。

「い……1億……5000万エリス……。」

初めて見る大金にカズマは生唾を飲んだ。

「ちよつと！これは私が貰ったんだからね！あげないわよ!?!」

「な、お前！いつもは一人損すると『パーティーでしょ?』とか言ってたかっってくるくせに！汚えぞ!?!」

「そうですよアクア、ここは平等に分けるべきです。」

「二人の言う通りだアクア。それに我々は殆ど何もしていないんだ。喧嘩になるくらい

ならいつそ彼に全額渡すという手も……。」

「いやよ！これは私のお金なんだから！ツケを払ったりお酒を買ったりするんだから！」

何やら口論が起き始めているカズマ達を尻目に、花山はゆんゆんの所まで歩いていく。

「お前の分だ、取つときな。」

そう言うのと花山は5000万エリスをゆんゆんに渡す。

「そんな、貰えませんか！私何もしてないのに……。」

「仲間つてのは、報酬を分け合うもんだ……。」

ぶつきらぼうにそう言う花山を見ながら、渋々ゆんゆんはお金を受けとった。このお金は出来るだけハナヤマさんの役に立つように使おうと彼女は内心決意する。

「見ろアクア、あれがパーティーの正しい姿だ。お前も元ナント力なら少しは見習ったらそうだ？」

「元じゃなくて今も女神なんですけど……わかったわよもう……。」

渋々アクアが報酬を分けたあと、カズマは花山のそばへとやってくる。

「いやーすいませんねハナヤマさん、俺たちまでおこぼれ貰っちゃって……。ところで、転生するとき女神に何を貰ったんですか？」

カズマは花山に一番気になってることを聞いた。魔王軍幹部に殴り勝つほどだよほど凄いものを貰っているのだろう。

そんなカズマの期待を裏切るように、花山は一本の酒瓶を取り出してみせた。

「こいつだ。」

「え？ いや、それただの酒じゃ……。」

「……見てな。」

そう言うのと花山は自身の口めがけて酒瓶を逆さにした。

絶え間なく流れる酒をガボガボと飲み続けること約20秒。机に戻された酒瓶には未だ満杯の酒が入っている。

「飲んでも減らねえ、らしい。」

「こんな……もつと強い武器とか凄い才能とかあったのに、なんでこんな物にしたんですか？」

腑に落ちないといった表情のカズマに、花山はグラス注いだウイスキーを差し出した。

「最初^{ハナ}つから強え奴が……強くなるうとしちや駄目だ。」

かつこいい。素直にカズマはそう思った。強者でありながら弱者を決して踏みにじらない彼の美学。思っていたヤクザとまるで違うという事を理解したカズマは。花山

に対する警戒心がかなり薄れた。

そんな本物の漢に注いでもつらた酒を飲む。カズマのいい気分は自分の仲間邪魔に邪魔された。

「今飲んでも無くならないお酒って聞こえたんだけど!？」

「おいアクア、今俺たちは真面目な話をしてるんだよ。宴会の女神様はあつちで宴会芸でもやってろ。」

「私は水の女神よ!謝って!誠心誠意謝って!」

睨み合うカズマとアクア。気にせず酒を煽る花山に、今度はダクネスが話しかけてくる。

「な、なあハナヤマ、今度一緒に強いモンスターに挑まれ……いや強いモンスターの討伐に行かないか?」

「何頼んでんだダクネス、お前の性癖にハナヤマさんを巻き込むじゃねーよ!」

「見ただろウ彼の戦いを!一切攻撃を避けないあの姿勢……彼ならきつと私の気持ちかわかるはず!!」

「ハナヤマさんの美学とお前の性癖を一緒にするんじゃないやねーよポンコツドMクルセイダー!」

「なんとという侮辱……んんっ!」

頬を赤らめるダクネスを無視してカズマは花山に向き直る。

「そういえばハナヤマさん、報酬金は何に使うんだ？」

「……………」

花山は考え込んだ。現状の生活に特に不満はない。武器や防具も買う必要のない花山にとって、この世界での金の使い方というのはなかなか思いつかなかった。

「…………酒——」

「ハナヤマさん!!」

「カズマ!!」

花山の言葉を遮ったのはゆんゆんとめぐみんだった。

二人の異様な気迫に四人は思わず注視する。

「家を買いませんか!めぐみん達よりも立派な!!」

ましよう!ゆんゆん

二人の声が同時に響く。バチバチと視線を交わす二人を見ながら、花山は呟いた。

「家か…………。悪くねえな。」

「確かに、俺もそろそろ馬小屋を出たいしいんじやないか?…………張り合う必要はないと思うけど。」

「駄目ですよカズマ、この自称ライバルに格の違いを見せてやるのです。」

「めぐみんこそ、アツと言わせてやるんだから！」

ずいぶん前からヒートアップしていたのだろう。すっかり暴走状態となった紅魔族二人は尚も騒いでいる。

「あれ？ハナヤマさん、どっか行くのか？」

「ウイズの所に用事だ。」

そう言つて花山は出口へ向かう。カズマの後ろにいるのは言い争う紅魔族二人と酔っ払い女神、そして変態クルセイダー。特に迷うこともなく、カズマは花山の後を追つた。

「この間の礼だ。」

ウイズ魔道具店についた花山は、ウイズに5000万エリスを渡した。一度きりとはいえ花山にとつてはウイズも立派なパーティーメンバーだ。

「頂けませんよこんな大金！大したこともしていませんし、私のことは気にせず自分のために使ってください。」

案の定ウイズはこれを断つた。だが、強情なのは花山も同じだ。

「二度出した銭だ。引つ込められねえ。」

「……分かりました。今度このお金でハナヤマさんの役に立つ道具を買ってきますね。」
——道具なんて使わないかもしれないですけど。

そう付け加えて、渋々ウイズはお金を受けとった。

「ところで、こんな大金いったいどうしたんですか?」

「あれ、ウイズは知らないのか?この前魔王軍幹部のベルディアってやつが現れてな。ハナヤマさんが倒したんだよ。」

花山に変わりカズマが答えると、ウイズは大きく目を見開いて驚いた。

「ベルディアさんを?あの方は魔王軍の中でも相当な剣の腕だったのですが……。もしかしてまた素手で?」

「そうなんだよ、禪一丁で一太刀も避けずに……。って、なんかベルディアを知ってるみたいだな。」

「言ってもませんでしたっけ?私も魔王軍の幹部の一人なんです。」

「……マジ?」

カズマが固まった。まだウイズとの付き合いが浅い彼には、ウイズを倒すという選択肢は当然出てくる。

だが問題は花山薫がウイズと懇意にしているという事。最悪の場合、花山薫を敵に回すという事態になり得るのだ。

さび付いた機械のように首を回し花山を見上げると、彼は一切動じた様子を見せずカズマに言った。

「こいつの事は俺が保証する……立場は関係無え。」

「ハナヤマさん、ありがとうございます……。それにカズマさん、私は結界の維持をしているだけの雇われ幹部ですから。……もしハナヤマさんたちが他の幹部も倒して魔王城に乗り込むことになったら協力しますよ。」

「うーん、それならいい……。のか?」

カズマが首をかしげる横で、今度は花山が一步前に出た。

「いいのかい?俺はウイズの仲間の仇つてことになるが……。」

極めて真剣な表情でそう尋ねる花山に、ウイズは少し悩んだ顔を見せると

「ベルディアさんは……私のスカートの中をよく覗こうとする人でしたし、特に仲が良いという訳でもなかったの……。それに今でも心は人間のつもりですから。」

どこか寂しそうにウイズはそう言った。

空気が少し湿っぽくなったその時。

「ごめんください。ウイズさんはいらつしやいますか?」

表の戸から、中年の男が入ってきた。

この男は不動産業を営んでいるらしく、所持している屋敷に悪霊が住み着いているた

め何とかしてほしいという相談をウイズに持ってきたのだった。

「悪霊討伐なら、ギルドに依頼したほうがいいのでは？」

ウイズの疑問は当然のものだが、すでにそれは試した後らしい。

「悪霊を何度払っても、新しい霊が住み着いてしまうのです。なので 今は貸出どころではなくなってしまうて……。」

「話は聞かせてもらったわ!!」

男の話に割り込むように、アクアが勢いよく扉を開けて入ってきた

「そう言う事ならこの女神にしてアークプリーストであるアクア様が引き受けてあげようじゃないの!……って、あー! あんたこの前のリツ——モガツ」

「お前はちよつと黙つてろアクア、てかお前らよくここがわかつたな。」

「ハナヤマは目立つからな。人に聞いたらすぐに分かつた。だがカズマ、何も言わずに置いていくなんて……私はそういうの……嫌いではないが……。」

もじもじし始めたダクネスの後ろから、今度は大粒の涙を流すゆんゆんが出てきた。

「ハナヤマじゃん……っ!! 私捨てられてないですよね?」

泣きながら抱き着くゆんゆんに花山が困惑していると、めぐみんが口を出す。

「ハナヤマ。ゆんゆんには友達がいらないんですから、一人で置いていくなんて真似はご法度ですよ。もう少し気を使ってあげなくては。……まあ捨てられたんじゃないのか

と泣かせたのは私ですが。」

「結局お前が一番悪いんじゃないか!!」

カズマのツツコミが響く。

「まあ、なんだ……。すまなかつた。」

当の花山はゆんゆんの頭に手を当て、子供をあやすようにそう言った。

「あの〜」

すつかりめちやくちやになってしまった店内の空気を戻すように、中年の男が口を開いた。

「アークプリーストと仰っていましたが、もしや依頼を引き受けてくださるんですか?」

「ええ、この私が悪霊なんて一瞬で片付けてあげるわ! そんなアンデツモガモガ……。」

カズマから解放されたアークアが自信気にそう語るが、ウイズへの罵詈雑言が出そうなところでカズマに再び口を抑えられた。

「私も店のほうがありますし、皆さんがやってくださいならとても助かりますが……。」

「ウイズさんがそう言うのであれば、彼らに依頼することにしましょう。上級職のアークプリーストにもなればきつと上手くやってくれるはずだ。報酬は……:そうですね、除霊が済んだら屋敷に無料で住める。というのはどうでしょう?」

「いいじゃない! 丁度家も探していた所だし、受けましょ!?! ね、カズマ!」

結局一同は依頼を受けることになり、中年の男は帰っていった。

静かになった店内で最初に口を開いたのはゆんゆんだった。

「勝負よめぐみん！屋敷の悪霊を先に除霊させたほうが勝ちよ！」

「いいでしょう！屋敷を手に入れるのはこの私です！」

自信満々にゆんゆんと対峙するめぐみんに、カズマは耳打ちする

「いいのか？勝手にそんな約束して……。」

「フツ、多少浄化魔法をかじっているとはいえ彼女はアークウイザード。本職のアクアがいる我々の勝ちが決まっていますよ。私は勝てない戦はしないのです。」

めぐみんの言葉にカズマは若干引きながら、今度は花山に声をかける。

「ハナヤマさんも、そういう事でいいか？」

「……ん……いや……まあ……。」

花山の返事はどこか曖昧だった。

するとそんな様子を見て、アクアがニヤニヤと声をかける。

「あれ？もしかしてハナヤマさん、悪霊が怖いのかしら？ププツ！」

瞬間、花山は大きく目を見開きアクアを睨んだ。おまけに体の輪郭はオーラでも出ているかのようにグニャグニャと歪んでいる

「おい馬鹿!!ハナヤマさん凄いや顔してるだろうが!すみませんハナヤマさん!!」

「と、とにかく今夜屋敷の前集合ですからね！逃げないでくださいよゆんゆん！」
めぐみんがそう言い残し、カズマ一行はそそくさと出て行ってしまった。

「あの、私もついていきましようか……？」

ウイズがそう声をかけた花山の背中は、いつもよりほんの少し小さく見えたという――
。

第六撃 悪霊屋敷

夜――。

件の屋敷の一室で、花山は静かに酒を飲んでいた。

月はとつくに真上を通り過ぎ、屋敷の中も静まり返った深夜。それでもこの一室だけは明かりが消えない。

眠くないのか、眠れないのか。それは知る由も無い。

ただ静かに、機械のように酒を口に運ぶ大男。

その背後で何かが蠢いた。

凄まじい速度で振り返った花山の先に居たのは、一体の西洋人形。

こんなものを部屋に置いた記憶がない花山の頬に冷たい汗が流れる。

ゆつくりと人形をつかもうとした瞬間、人形が動き眼前へと肉薄した。

常人なら悲鳴を上げて逃げ出す場面。

だが花山のこれまでの経歴と類まれなる闘争本能は、己の身体に攻撃を命じた――。

一体どれほど眠ったのか。カズマはふと夜中に目を覚ました。

変な時間に起きてしまった思いながら、尿意に従って部屋の外へ出ようとする。

直後、カズマの部屋の壁が、爆ぜた。

カズマが目を覚めたのは、彼の強運、あるいは本能的な危機回避能力によるものだったのかもしれない。

ともかく、彼はドア付近に移動していたおかげで被害を免れた。

「部屋がね、一つになっちゃったんです。」

「恐る恐る無くなった壁の先を見たら何がいたと思います?」

「ハナヤマ・カオルです。」

「悪霊なんかよりよっぽど怖いですよ。そんな男が何を思ったのか、いきなり俺の部屋の壁を破壊してきたんです。」

「正直、殺されるかと思いました。……でもすぐにハナヤマさんが戦ってる相手が分かりました。」

「西洋人形です。これくらいの大きさの。どこから湧いたのか、まるで蜂の集団みたいハナヤマさんに群がってきて……。」

「ハナヤマさんですか?……それがね、最初は一体ずつ掴んで放り投げてたんですけど

……。」

「例えば、馬車にモンスターがしがみついていたらどうします?」

「速度を上げて振り落とす……そう、ハナヤマさんもそうしたんだと思います。」

「巨体がね、ものすごい速さで通り過ぎていきました。」

「……その後? 知りませんよ、隣行っちゃったんで。隣ってというか、ずっと向こうに……。」

花山が壁をぶち抜くこと4枚。人形の残骸をまき散らしながら、加速した巨体は二階から外に放り出される。

カズマが慌てて一階へと降りると、騒ぎを聞いたらしいめぐみんとゆんゆんが丁度廊下へ出てきていた。

「凄い物音がしましたが、カズマ、何があつたんですか?」

「……悪霊を吹き飛ばしながらハナヤマさんが二階から落つこちた。」

「え? それ大丈夫なんですか!」

「ハナヤマさんより部屋の方が大丈夫じゃない。二階に大部屋が出来ちまった。……と
いうか二人とも同じ部屋で寝てたのか?」

「ゆんゆんがどうしても怖いというので、仕方なく一緒にいてあげたんです。」

「私の部屋に来たのはめぐみんの方じゃない!!」

要するに二人とも怖いんだなとカズマは思った。

他のみんなはどうしたのかと首を回すと、突如玄関の方からアクアの悲鳴が響いた。

「アクア!大丈夫か!?!」

カズマ達が駆け付けた先では、アクアとダクネスが二人がかりでドアノブを押さえつけていた。

「二人とも、何をしているんですか?」

その異様な光景に最初に疑問を挟んだのはめぐみんだった。

「今、悪霊の気配をたくさん纏ったバカデカい何かが入ってこようとしたのよ!だから中に入れないようにしているの!」

「いや、それ多分ハナヤマさん……。」

カズマが言いかけたとき、業を煮やしたようにドアノブが一気に動いた。

「おッおッお!!?なんて握力だッッッ」

ついにダクネスの力が負け、ドアが開かれた。

そこに居たのはやはり体中人形にまわりつかれた花山薫。

「ついに入ってきたわね!?!先手必勝!『ゴッドブロー』!!!!」

ろくな確認もせず、アクアが右拳を打ち付けた。

しかし、いかに女神とはいえアクアの細腕で花山の強靱な体に本気の拳をぶつけたらどうなるか。

ポキッ——

小気味よい音が響いた。

花山の身体に流れた神聖な力によって、まわりついていた人形がぼろぼろと地面に落ちる。

それと同時にアクアの右腕が不自然な方向へ垂れ下がった。

「ぎゃああああああああああああああああああああ」

「なるほど、アクアの腕の方がもたなかったか……。」

「冷静な分析してる場合じゃねーだろ!?!おいアクア、大丈夫か!?!」

ダクネスをよそに、カズマはアクアへと駆け寄った。

「カジユマじゃん……!?!うで、うでおれちゃったあ……!?!……グスツ……!?!」

「まあ被害的にはお前に同情するけど、確認もせずいきなりぶん殴ったのお前だからなあ……。」

「うわああん!!カズマさんが優しくしてくれないいいいい!!」

泣きわめくアクアは放っておくことにして、カズマは花山の方を見た。

ゆんゆんが花山の心配をしているようで、あれやこれやと質問したり体に触ったりしている。

二階は半壊しアークプリーストも負傷という状況にカズマが頭を痛めていると、めぐみんに慰められ気を持ち直したアークアが花山の前へと立った。腕は自分で直したらしい。

「ハナヤマ！あなた私を本気で怒らせたわね!?女神の腕を折るなんて重罪よ!」

「いや、折ったというよりアークアさんの腕が勝手に折れただけじゃ……。」

「うるさーい!!とにかくあなたも同じ目に合わせないと気が済まないわ!」

ゆんゆんの言葉に怒りのボルテージが上がったアークア。

そんなアークアを見て、カズマに嫌な予感が走る。

「アークア、やめろ!」

「水の女神の裁きを受けなさい!『セイクリッド・クリエイトウォーター』」

カズマの制止も聞かず、アークアが魔法を唱えた。

局所的な大洪水は、花山だけでなくその場の全員を飲み込み――。

!!!!

翌日

「不動産屋のおじさん、茫然としていましたね。」

ギルドで食事をしながら、めぐみんが思い出したように言った。

「そりゃあ、悪霊退治を依頼した屋敷が一晩で瓦礫の山になってたらなあ……。」

昨晚アクアが生み出した大量の水は、津波のように屋敷の中に流れ込み支柱をすべて破壊した。

その結果屋敷は倒壊し、悪霊どころか屋敷ごとなくしてしまったのだ。

「さすがに私も、屋敷の残骸を見た時のあの男の目はしばらく忘れられそうにないな……。」

そう呟いたダクネスの横には、『私は屋敷を破壊しました』という紙を首から下げたアクアが静かに座っている。

「結局、屋敷の立て直し費用で家買うどころじゃなくなつたな。それなりに手持ちは残るけど。」

修繕費は花山とカズマ達で半分ずつ出し合うことになった。

屋敷を倒壊させたのは確かにアクアだが、二階部分は花山が半壊させている。

最初は花山が全額出すと言ったところをカズマが半々にしたのだった。

「そうですね、ゆんゆんとの勝負もあやふやになってしまいましたし。……残念です。」

「そういえばハナヤマはどうしたんだ？ 不動産屋に謝りに行ってから姿が見えないが

……」

「ああ、それなら……」

花山はウイズの店にいた。

元々ウイズに持つてこられた依頼を代わりに受けたにもかかわらず、それを失敗してしまったことへの詫び入れをするためだ。

「そんなに落ち込まないで下さい、ハナヤマさん、ゆんゆんさん。代わりに受けて頂いただけでも助かってますから。」

そう言つてウイズは二人にお茶を出す。

「でもウイズさんの信用にも関わるのに……お詫びに何か買います!」

「いいですよそんな、気を使わないでください。私たち友人じゃないですか。」

ウイズの『友人』という言葉に思わずゆんゆんの顔がにやけた。

そして彼女は勢い良く立ち上がると、店内の物色を始める。

彼女のこれまでの経験から友達には貢ぐという習性が出来上がってしまったのだ。

「それに、あの子たちも楽しかったと思いますよ?遊んでもらえて。」

「遊び?」

商品を手に取りながらゆんゆんが聞き返す。

「ええ。悪霊なんて呼ばれています、あの子たちはただ成仏できずに彷徨っているだけなんです。ただ彷徨うのは退屈ですから、皆さんが来て良い遊び相手になつたと思えますよ。」

「そうやって聞くと悪霊なんて人聞きが悪い感じがしますね。」

「そうですね。ただあの子たちはちよつといたずらが好きで、自分のことを怖がっている相手には寄って行ってしまふんです。それが悪霊と呼ばれる原因かと。」

二人の会話を聞いていた花山の身体がビクつと震えた。

顔は見えないが、ウイズとゆんゆんには背中が少し萎んだように見えたという――。

第七撃 熊鍋

冬も段々と本格的になってきたアクセルの街。

室内でも寒さを感じる宿屋の一室で、ゆんゆんは真つ赤な顔で布団にもぐっていた。

「すみませんハナヤマさん……風邪引いちゃったみたいで……けほっ……。」

ゆんゆんは基本的に服装を変えない。

周りが雪景色の中を普段通り肌色の多い格好で活動していたツケが来たのだろう。

当然の如く風邪を引いたゆんゆんは見舞いに来たハナヤマにしきりに謝っている。

「気にすることじゃねえ、治すことに専念しな。」

「うう、でも今日はハナヤマさんとクエストに行く予定だったのに……。」

一年の中でも冬は極端にクエスト数が少ない。

危険度の高いクエストが多くなるため駆け出しの街まで依頼が降りて来ないのだ。

そんな中ルナからクエストボード更新の情報を聞き、大喜びで予定を立てていただけ

あつてゆんゆんの悲しみは計り知れない。

———そういうえば昔から、遠足の日に熱出してたなあ私……。

思い出される昔の寂しい記憶。

行事のたびに熱を出しては周りとの距離が出来ていったあの頃の記憶が蘇り、ゆんゆんの目に涙が浮かぶ。

そんなゆんゆんを見かねてか、花山は見舞いに持つてきた花束の茎以外を一気に引き抜き握りしめた。

そして絞り出された一滴を左手で受け、ゆんゆんの顔に手をかざす。

「あ……いい香り……。」

花の香りに包まれたゆんゆんは、風邪で体力を消耗していたこともあり途端に瞼が重くなる。

その様子を見て花山は静かに部屋を後にした。

ルナにクエストを受けると言っている以上キャンセルという選択肢はない。

寒空の中、花山はギルドへと歩を進めた。

「いい女？ハーレム!?俺の濁った眼玉じゃ見当たたらねえよ!?お前良いビー玉つけてんな、俺の濁った眼玉と交換してくれよ!!」

花山がギルドにつくと、聞こえてきたのはカズマの怒声だった。

何やら他の冒険者と揉めているらしく、カズマが早口にまくし立てている。

カズマに絡んでいた酔っ払いの男は、カズマの反論の方向性が思っていたのと違った

らしく、困った顔をしている。

「わ、悪かったよ……俺も酔った勢いで言い過ぎた。でも隣の芝生は青く見えるっついうか……一日、一日だけ代わってくれよ冒険者さんよ?」

「よし分かった代わってやる、一日と言わず好きなだけ交代してやるよ!」

仲間の意見を封殺し、カズマは酔っ払いにパーティーを貸し出すことを決めた。

酔っ払いの仲間たちも今日はクエストを受けないからと了承し、即席パーティーが結成される。

彼らを見送ったカズマはようやく花山を視界に捉えた。

「あ、ハナヤマさんこんにちは。……ゆんゆんは?」

「……風邪だ」

「そうなのか、後でお見舞いいこうかな。……ところで、何のクエストを受けるんだ?」

「一撃熊の討伐。」

——見たい

花山薫対一撃熊……あまりにも魅力的な響きに思わずカズマは頭をさげた。

「一緒に連れて行ってください!」

本日二組目の即席パーティー誕生の瞬間である。

ギルドでのクエスト受付を済ませた花山達はアクセル近郊の畑までやってきていた。

目的は農家を悩ませる一撃熊の討伐。その名の通り一撃で相手を屠る巨大熊だ。

冬眠から目覚めてしまった個体は非常に気性が荒く、その凶暴さは類を見ない。

「俺の敵感知スキルに反応がある……ハナヤマさん、そろそろ来るぞ。」

ハナヤマは現在、農村の入り口で一撃熊を迎え撃つように立っている。

これはカズマの発案で、『腹をすかせた一撃熊は、畑を荒らすだけじゃ足りずに農家の人を襲いに来るはず。』という考えに基づいている。

そしてカズマの予想通り、うめき声を上げながら黒い影が花山の目の前へとやってきた。

「デカッ!? 5mはあるぞ!」

花山と対峙し立ち上がった一撃熊のあまりのサイズに思わずカズマは声を漏らす。

一撃熊はゆっくりと眼鏡を外す花山に、右前足を思い切り振り下ろした。

——腹が減った、腹が減った、腹が減った

獣は我慢の限界だった。この寒い時期に目を覚ましてしまつて以来、絶えず空腹に苛まれている。

——長いこと喰ってねえ……今日こそはあいつらを喰ってやる……

——お!?

餌を求めて彷徨う獣がやってきたのは、ニンゲンの集落。

いつもは逃げられたり隠れたりしてしまっところに、今日は餌が一匹立っていた。

——餌!!しかも結構多い!!ウマそくくくくくッ

久しぶりの餌を前にして、獣は歓喜に喉を鳴らす。

——逃げないね……餌のくせに……まあいいや……

どんな相手も一撃で屠ってきた傲慢の前足。

久々の餌の前に一秒も我慢できない獣は思い切りそれを叩きつけた。

——は!?倒れねえ……餌の分際で……ッ

餌は千切れることも吹き飛ぶこともなく、背中が見えるほど大きく体を振っている

——早く死ねよッ俺は腹が減ったんだッ

獣は前足をもう一度振り上げた。

しかしその瞬間、何かが顔面に激突し——獣の命は終わった。

一撃熊の初撃を余裕をもって耐えた花山は、まるで投擲のフォームの如く大きく拳を振りかぶる。

体重×スピード×握力∥破壊力

利那、この式を証明するかのような拳が一撃熊を襲う。

距離にして目測10m、回転すること四回と半分。

首の骨と頭蓋骨が完全に破壊された一撃熊は、一撃をもつて絶命した。

「向こうが一撃熊ならこっちは一撃ハナヤマだからなあ……こうなるのも当然っちゃ当然か……。」

一部始終を見ていたカズマの心中では興奮と同情がせめぎ合っていた。

「冒険者様、ありがとうございましてー！これで安心して冬を越せますー！」

戦いの終わりを察したのか、農家の住民が花山達の所へ集まってくる。

「彼らは感謝の言葉とともに自分たちの畑で獲れた野菜を渡し、花山とカズマは白菜やネギなどであつという間に両手がふさがってしまった。

「いやー、農家のみんな良い人だったな。」

夕日に照らされた帰り道、風呂敷で野菜を運びながらカズマは言った。

花山はというと一撃熊の亡骸を引きずって歩いている。

「……カズマ、飯作れるか？」

「え？まあ、とりあえずは出来るけど……。」

「今夜は熊鍋だ……。」

カズマは突然の質問の意図をようやく理解した。

「……俺、熊捌くとかできないぞ?」

「それはギルドの奴がやる、問題ねえ。」

その言葉通り、引き渡しの際に花山は一撃熊をギルド職員に捌かせた。

肉の売り上げは僅かに落ちるものの、新鮮な食用肉を手に入れたのだ。

その間カズマはパーティー交代を行った酔っ払い——ダストが土下座で謝るのを適

当にあしらい、ついでにアクアたちからの不平不満にも聞こえないふりをしていた。

そして戻ってきた花山と一緒に宿へと向かい、今は部屋で鍋の支度をしている。

ゆんゆんを呼びに、花山は宿の一つ上の階へと上がる。

実はゆんゆんはパーティーを組んだ翌日に花山と同じ宿へと移ってきていた。

ゆんゆんの部屋をノックすると、目が覚めていたのかすぐに出てきた。

朝よりは体調もよさそうで、顔の赤みも落ち着いている。

「飯だ、ついてきな。」

「もしかして作ってくれたんですか?」

「……俺じゃねえ。」

そっぽを向いて歩き出す花山をゆんゆんは追った。

花山の部屋の前からはすでにいい匂いがしている。

「お、いいタイミング。カズマさん特性熊鍋、丁度今出来上がったところ——」

部屋の中でせつせと灰汁取りをしていたカズマがピタッと固まる。

「……パジャマ、良いと思います。」

「ひっ……。」

ゆんゆんを舐めまわすように見て言ったカズマにドン引きしながらも、ゆんゆんはテーブルに着いた。

中心に置かれた鍋の中では色鮮やかな野菜と、綺麗な赤身肉が踊っている。

いただきますの合図の後、三人は一斉に鍋に手を伸ばした。

「美味しい……野菜もお肉も新鮮でとっても美味しいです！」

「そりゃあ、野菜は産地直送、肉も捌きたてだからな。おまけに滅多に食べない一撃熊鍋だ。」

「え!?じゃあこれ今日のクエストで取れたお肉なんですか?」

自分が行けなかったクエストで取れた肉を口にする、ゆんゆんの性格では多少申し訳なさを感じてしまう事柄だ。

「……風邪に効く。しっかり食え。」

箸が止まるゆんゆんを叱るように、花山はぶつきらぼうに言う。

「熊鍋は美容健康滋養強壮に良いって聞くしな。それに俺としてはゆんゆんが風邪を引いたおかげで鍋が食べられてるからな、むしろ感謝したいくらいだぜ。」

「もう、カズマさん意地悪ですよ?」

思えばゆんゆんは、風邪の見舞いも誰かが自分のために料理を作ってくれるのも初めての経験だった。

だからこそ気後れしてしまう部分もあったのだが、今は二人の気遣いを素直に受け取ろうと再び鍋に手を伸ばす。

鍋の効果だけではない、体と心が両方温まる感覚がゆんゆんを包んだ。

……ちなみに翌日、鍋の話が聞かれたカズマが三対一で責められたのは言うまでもない。

第八撃 機動要塞

花山とゆんゆんは現在、気球の上から機動要塞デストロイヤーを眺めていた。

事の起こりは今朝、アクセルの街にデストロイヤー警報が鳴り響いたことに始まる。

阿鼻叫喚。騒然とする街の中、ギルド職員に頼まれ先行偵察部隊として二人は気球に乗り込んだ。

デストロイヤーの背部には、上からの攻撃への対策として自立型ゴーレムがバリスタを装備して待ち構えている。

その射程に気球が入らないよう高度に注意しながら、双眼鏡でデストロイヤーを観察しているギルド職員は苦々しげに呟いた。

「マズいですね、一直線に向かってくる……。あと一分ほどで気球の下をデストロイヤーが通過します。街の人々に残された猶予は30分ほどしかありません。」

「ゆんゆんの魔法でどうにかならねえのか?」

「デストロイヤーには常時強力な魔法結界が張られているんです。私の魔法ではおそろく傷一つ付きません……。」

花山の疑問をゆんゆんが否定する。

すると花山は少し考えた素振りをした後、今度はにやりと笑った。

「……殴れば壊れるんだな？」

「ええ、まあ、物理攻撃は効くと言われていますが……。」

「……そうか。」

ギルド職員の答えに満足そうな顔をした花山は、今度はゆんゆんに向き直る。

「ついてくるか？」

「え？は、はい！」

質問の意図がわからず、しかし半ば花山薫の追っかけと化しているゆんゆんは思わず首を縦に振る。

すると突然、花山がゆんゆんに抱き着いた。

「あ、あの、ハナヤマさん!?!何を——」

いきなりのことに顔を真っ赤にしたゆんゆん。

しかしその抗議の声を遮るように、突如彼女の視界が大きく動いた。

「……え？」

あまりの出来事にギルド職員から呆けた声が漏れる。

なんと花山は自分の背中を地面に向け、今まさに真下を通過しようとしているデストロイヤー目掛けて落下したのだ。

ゆんゆんを抱きかかえたまま。

「きやああああああああああああああああ!!」

ゆんゆんの絶叫が雲一つない空に響き渡る。

真つ赤だった顔は驚くほど真つ青になっており、先ほどの自身の返答をやや後悔しながら空気を切り裂いていく。

10秒ほど経っただろうか。

花山の腕の中で強烈な衝撃を受けたゆんゆんは、ようやく落下が止まったことを理解した。

デストロイヤー背部にできたクレーターの中心で花山の腕から抜け出したゆんゆん。

落下の衝撃とでフラフラな頭を覚まし、花山に声を掛ける。

「ハナヤマさん!大丈夫ですか!」

対して花山は平然と立ち上がる。

背中は何本もバリスターの矢が刺さっているにも関わらず、特に気にする様子もなくあたりを見回している。

「うまく乗れたみてえだな。」

「……そうですね。」

——それって失敗したら地面に叩きつけられてたつてことですか？

喉まで出かかった言葉をゆんゆんは飲み込んだ。

地面の上もデストロイヤーの上も大して変わりはないだろうと思っただからだ。

他にも『なんで落ちた衝撃で矢が貫通してないんですか?』とか『矢が刺さったまま
で痛くないんですか?』等々色々な疑問が浮かんだが、ゆんゆんは考えるのをやめた。

「……ハナヤマさんは凄い。それでいいや。」

小さく呟いたゆんゆんは何も言わず花山の背の矢を引き抜いていく。

当然ながら痛がる様子は一切ない。

自分がついていくと決めた漢の規格外さに圧倒されていると、いつの間にか彼女たち
の周りにゴーレムが集まってきていた。

「ハナヤマさん、急いでゴーレムを倒して中枢に向かいましょう! 街に着くまでもうそ
んなに時間ありません!」

「……そうだな。」

『ライト・オブ・セイバー!』

花山が眼鏡を外すと同時に、ゆんゆんが魔法で切りかかる。

広範囲のゴーレムが一刀両断にされたのを見て、ゆんゆんは歓喜の声を上げた。

「乗り込んじゃえば魔力結界の影響を受けないのね……! 私も役に立てるかも!」

ゴーレムを真っ二つにするゆんゆんの背後では、花山がゴーレムを粘土細工のように

潰し、千切り、破壊していく。前蹴り一発で地面へと落下してくゴーレムもいた。

「もうゴーレムはいないみたいですね。……でも、どこから入りましょうか……？」

僅か30秒足らずでデストロイヤー背部のゴーレムを一掃した二人。

とはいえ目的はデストロイヤーの侵攻の阻止であり、そのためには内部へと侵入しなければならぬ。

窓や扉といったものが見つからない以上、ゆんゆんの疑問はもつともだ。

「……ん。」

首を傾げたゆんゆんに、花山は背を向けてしゃがんだ。

「えっと、ハナヤマさん、これは……？」

「……乗りな。」

「ええ!?!の、乗るって背中に!?!」

幼少期ならいざ知らず、14歳にもなって他人に、それも異性に背負われるというのはゆんゆんにとつてかなり恥ずかしいことだった。

「しつかり掴まってな。」

意を決して背中に飛びついたゆんゆんを持ち上げると、花山は右腕を大きく振り上げた。

そしてそれを思い切り足場に叩きつけると、拳を中心に大きめの穴が開き、瓦礫と化

した足場とともに花山達は内部へと落下した。

「怪我はねえか。」

「はい、ありがとうございます！」

ゆんゆんを降ろした花山は彼女の無事を確認すると辺りを見回した。

「お前は奥に進みな。」

「……ハナヤマさんはどうするんですか？」

「脚壊してくる。」

そう言つて花山は横の壁を破壊すると。右の四本足の付け根を目指して歩き出す。

ゆんゆんはその背を見送った後、自分の役割を全うしようと中枢を探し始めた。

くくく

ゆんゆん達がデストロイヤー内部に消えるまでの一部始終を見ていたギルド職員は、双眼鏡から目を離すと天を仰いだ。

「……夢でも見てるのかな……。まあいいや、ギルドに報告しに行こう。」

ギルド職員はアクセルへと引き返した。

くく

一方アクセルのギルド内では、機動要塞デストロイヤー討伐のための会議が開かれていた。

「それではお集りの皆さん、ただいまより緊急の作戦会議を行います！」

ルナの指示で着席した冒険者たち。

その数はゆうに100人を超え、特に男性冒険者は真剣な面持ちで集まっている。

サキユバスの店のため……もといアクセルの街のため立ち上がった彼らは、デストロイヤー討伐のため次々に案を出していく。

「なあアクア、お前ならデストロイヤーの魔力結界を破れるんじゃないか？」

行き詰った会議の中、口を開いたのはカズマだった。

「んー、やってみないとわからないわよ？」

アクアの返答にギルド内は大騒ぎとなる。

魔力結界さえ排除できれば、めぐみんの爆裂魔法で何とかなるはず。

頭がおかしい呼ばわりしながらも、冒険者たちの期待のまなざしがめぐみんへと集まっていく。

「うう、我が爆裂魔法でも、さすがに一撃では破壊できないかと……。」

顔を赤くしながら、めぐみんはほそぼそと言った。

空気が少し重くなる中、せめてあと一人爆裂魔法が使えるやつがいればという思いが彼らの中に渦巻いていく。

そんな期待に応えるように、ギルドの戸を開けてウイズがやってきた。

「すみません、遅くなりました。私も一応冒険者の資格を持っているので、お手伝いできればと……。」

途端にギルド内は歓声に包まれる。

騒がしくなった冒険者を鎮めるようにルナが二回手を叩いた。

「では、店主さんが来たのもう一度まとめます。まずアークプリーストのアクアさんがデストロイヤーの魔力結界を解除。そしてめぐみんさんが爆裂魔法を撃ちこむ。という手はずになっていました。」

「それでしたら、私も爆裂魔法が使えるのでめぐみんさんに協力しますよ。……狙う場所は足がいいですね。機動力さえ抑えてしまえばあとは何とでもなると思います。」

ウイズの助言により作戦が固まった。

ルナの号令で前衛職はハンマー、軽装の者はロープを持ち、万が一の場合には突入できよう用意している。

「冒険者の皆さん！まもなく機動要塞デストロイヤーが現れます！住人の方々は町の外へ避難を！冒険者の方は戦闘準備をお願いします！」

冒険者がアクセルの正門前に集まってほんの数分後、ギルドからの緊急放送とともにデストロイヤーがその姿を現した。

今回の作戦指揮はカズマに一任されている。

作戦主要人物がカズマのパーティーメンバーだからなのだが、そのメンバーの一人は指示を聞かず頑固に最前線に立っている。

ダクネスの説得をあきらめたカズマはめぐみん達の所へと戻ってきた。

デストロイヤーはもうすぐ射程距離に入る。あとはカズマが号令を出すだけだ。

「責任重大だぜ畜生。指揮官なんてのは本来ハナヤマさんみたいな人が……そういえばハナヤマさんどうした？」

「ゆんゆんも見かけませんね、避難したのでしょうか……。」

「カズマ！めぐみん！もう近くまで来てるんだから無駄話してないでよ!!」

「あの人が避難するとは思えないけどまあいいや！時間がない！アクアッ！頼むツ!!」

アクアに急かされ、カズマが指示を飛ばした。

『『セイクリッド・スペルブレイク』!』

アクアの周囲に複雑な魔法陣が浮かび上がったかと思うと、その手には白い光の玉が浮かんでいた。

そしてそれを前にかざし、デストロイヤーに向けて打ち出した。

光の玉がデストロイヤーに触れた瞬間、その巨体を覆っていた薄い膜のようなものが浮かび上がる。

一瞬の抵抗の後、それはガラスが割れるかのように粉々になった。

「ウイズ、めぐみん！爆裂魔法で足を吹き飛ばしてくれ!!」

指示を聞いてウイズが詠唱を始める。

カズマが爆裂魔法を馬鹿にしたことで発破をかけられためぐみんも、怒りで口元を引きつらせながら力強く詠唱をする。

不意に、誰かがカズマの袖を引いた。

振り返った先に居たのは何やら息を切らしたルナだった。

「今連絡が入りました。カズマさん、お二人を止めてくださいー!」

「え？なんでまた急に!?それに爆裂魔法を止めたら街が!」

カズマは混乱した。先ほどまでデストロイヤーに向けて冒険者をまとめていた彼女が何故いきなり止めるのか。

それに爆裂魔法は言って止まるものでもない。特に頭のおかしい紅魔の娘の方は。

そんなカズマの疑問を払拭するルナの言葉と、二人の詠唱が終わるのは同時だった。

「中にハナヤマさんとゆんゆんさんが乗り込んでいるんです!」

「『『エクスプロージョン』!!』」

慌てて身体を反転させたカズマは確かに見た。

向かって左——めぐみんが狙っていたほうの足が二本、デストロイヤーが爆裂魔法を受けるよりも一瞬早く千切れ落ちたのを。

それは爆炎に包まれ崩れ落ちるデストロイヤーの中に、確実に二人がいることの何よりの証明だった。